

おわりに

本校では、文部科学省の研究指定を受け「知的障害のある児童生徒の質の高い学びを実現するために必要な学習指導と評価の在り方」について研究を進めてきました。各教科等合わせた指導における学習内容、指導方法、評価の在り方について見直し、評価の観点を整理して、今年度で3年目、結びの年となりました。

本研究に取り組む以前は、ほとんどの教師が「生活単元学習や作業学習等は、国語や算数理科、図工等、各教科等の要素を合わせ、それらの内容を生活に基づいた単元の中で総合的に学ぶ学習の形態」という漠然とした押さえでしかなかったように感じます。また、各教科等を合わせた指導における評価の在り方については、児童生徒の意欲や態度により判断する部分が多く、各教科等の内容に基づいているにもかかわらず、何を学習し、何ができたのかまた、評価の観点等についても十分に説明できない状況にありました。

そこで、研究部を中心に、各教科等を合わせた指導において学習内容の選定や評価を適切に行うための3つのツールの作成し、教師間で共通の視点を持ち学習内容、指導方法、評価の在り方等についての見直しを行いました。まず「単元記録表」「各教科等内容表」の活用により、教師が各教科に視点を当てた指導内容を意識し、よりよい教育実践の方向性を示すことができました。評価の観点も意欲や態度に偏らず各教科の視点をもつことができました。また、「アセスメントシート、行動記録評価表」では、単元の担当者と学級担任が目標や活動内容、評価について共通理解し、PDCAサイクルに基づいて振り返り、授業改善を行うことができました。この3つのツールを活用した授業改善は、実践のための研究活動として3年間の研究の中での大きな成果であると考えます。

また、3年目の中心的な取組である「質の高い学び」については、主体的・対話的で深い学びについて事例をとおして検討することで「考える時間の確保」「判断する場の設定」等、日頃の授業を見直す視点を、教師間で共通理解するよい機会となりました。教師一人一人が自分の授業について振り返ることができ、「すすんで学び、考え、行動する子」という本校の考える「質の高い学び」に迫ることができたのではないかと思います。

一方で、学校教育目標にまで立ち戻ったPDCAサイクルに基づいた授業改善を行うことは、まだ難しかったと言わざるを得ません。今後も、児童生徒の卒業後の姿を描き、各教科等内容表を活用しながら学習目標を選定し、本校の学校教育目標に掲げられている「子どもが豊かに育つ教育」を目指し、実践を積み重ねて行きたいと考えます。

最後になりましたが、お忙しい中、本校の研究を進めるにあたり貴重な御助言をいただきました教育課程研究協議会委員の眞城知己先生、中村晋先生、磯辺雅志先生、佐々木操先生、松田厚先生、塩田順子先生におかれましては、心から感謝申し上げますとともに、今後もより一層の御指導と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

教 頭 千 葉 朋 緒